オピニオン ～教界から～

阪南大学　国際コミュニケーション学部教授　村田充八

心に平和への情熱を

暑い夏が来ると、戦争を知らない世代とはいえ、広島と長崎が原爆投下の直撃を受けたこと、被爆の苦しみが今も子や孫へと続いていること、先の大戦において我が国がアジア諸国を中心に多くの苦しみを与え、民間人を含め夥しい数の犠牲者がでたことなどを想起する。あのような悲惨な戦争が、どうして10数年にもわたって続けられ、アジア諸国や我が国に、多くの苦しみと犠牲者を生み出したのかと、しばしば考え込んでしまう。

そのときまた、戦争を生起させた人間の「心」に関連し、「何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある」（箴言4・23）、という聖句が浮かんでくる。この聖句は、我々の行為や思考の出発点（「命の源」）でもある「心」を、「悪」から遠ざけて、「悪」なる行為を起こす源泉とするなと警告を発している。

我が国は、先の大戦の経験から、「命の源」としての「心」に、「平和への情熱」を刷り込む道を意図的に選び取り、「平和憲法」を作り上げた。前文には、国民が「再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、また「恒久の平和を念願し」、「全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」と高らかに宣言した。さらに、第二章「戦争の放棄」には、その理想を具体的に実現するために、第九条「戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認」を定めている。我が国は、「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使」は、「永久にこれを放棄する」と誓ったのである。第九条二項には、「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」と宣言されている。

「平和憲法」は、先の戦争の犠牲の上に、人々が二度と戦争を起こさないと「心」に誓って、「平和への情熱」を基として打ち立てられた「崇高な理想」であり、「敗戦」の大きな遺産なのである。

しかし、現実はどうであろうか。この「憲法」を改正しようとする策動は、国民の間に徐々に浸透しつつある。「分別をわきまえ」（箴言4・1）た者の発言とはとうてい思えないような、戦いを許容する声が、責任ある立場の為政者や、識者とされる者から堂々と発せられる。それは先の戦争から何も学んでいない安直な戦争肯定論となって、人々の「心」に次第に影響を与え始めている。

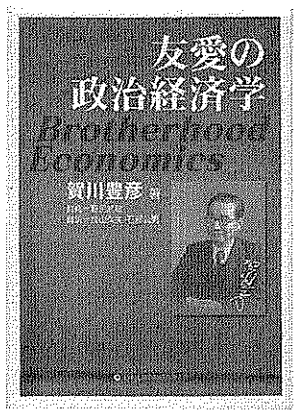
「言論の自由」は守られるべきだろう。しかし戦後の「平和への情熱」は、どこに消えたのであろうか。若者たちのなかには、安易に軍備の拡張こそが現実の国際情勢に対処する道であると発言したりする者もある。「平和への情熱」は、今や戦争肯定論の既成事実化の影に覆い隠されてしまったかのようである。

我々は、旧約の預言者イザヤやミカが、「終末の平和」にみた「幻」の姿を、もう一度「心」に深く刻みつけるべきだ。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤と し、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」（イザヤ2・4）。その「幻」こそが、我が国の「平和への情熱」をかき立て、「平和憲法」へと結集されたことを思うべきである。

＊本稿の引用聖句は新共同訳です。

贖罪愛の実践が平和を実現する

賀川豊彦 幻の講演録 73年ぶり邦訳



今も古びない「第3の道」 戦争前夜に世界平和提唱

満州事変（1931）から日中戦争（1937）へ向かうさなかの1936年、伝道者賀川豊彦（1888～1960）が米国でセンセーションを巻き起こした講演録が、このほど73年の時を経て邦訳され、『友愛の政治経済学』（監修＝野尻武敏、翻訳＝加山久夫、石部公男）として出版された。原題は、Brotherhood Economics。キリスト教信仰に裏打ちされた「兄弟愛」の原理を、世界恐慌の余波に苦しむ時代に向かって示し、現実の社会において世界が進むべき道を説いた熱弁だ。そこから、様々な社会改良に取り組んだ賀川の眼差しが「世界平和」を見据えていたことが伝わる。

本書の元になったのは賀川が1935～36年、米国のコールゲイト・ロチェスター神学校のラウシェンブッシュ基金の招きで4回にわたって行った「キリスト教的友愛と経済再建」と題した講演。当時すでに、賀川の名前と業績は世界で知られていた。英文の講演録が出版されると版を重ね、ドイツ語、スペイン語、中国語など17か国語に翻訳されて25か国で出版された。だが、なぜか日本では顧みられなかった。今年は賀川豊彦が神戸・新川のスラムで伝道と救貧活動に身を投じた献身から100年。その記念事業の一環として、賀川が創設した日本生活協同組合連合会が出版した。

賀川は同書の序文冒頭で、「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行なう者だけが入るのである」というイエスの言葉を引き、次のような考えを述べている。「今日ほど、キリストの教えが挑戦を受けている時代はかつてなかった。もし教会が社会において愛を実践しようとするのであれば、その存在理由はあるだろう。私は、信条だけで世界を救い得るとは考えない。信条が重要でないと言うのではなく、信条や教義とともに、社会での贖罪愛の適用が必要なのである」

実際に、賀川の「献身」の初めは救貧活動だったが、その後米国プリンストン大学への留学を終えて17年に帰国すると、活動の主軸は窮民への慈善活動から窮民を生み出す社会体制の変革運動に移っていく。そうした中で第1次世界大戦から第2次世界大戦に至る時期に労働運動、農民運動、普選運動、協同組合運動、平和運動などが展開されたと、監修者の野尻武敏神戸大学名誉教授は「まえがき」で指摘している。

『友愛の政治経済学』で賀川は、科学技術が発達しながら世界が不安にさいなまれ、貧困にあえいでいる状態を「カオス」（混沌）と捉え、そこから抜け出す道はあるのかと問う。そして自分が歩んできた信仰と社会実践を証し、キリストと経済へと論を進める。

野尻氏も指摘するように、当時は大恐慌で自由資本主義が挫折し、代案として共産主義やファシズムが台頭してきた時代である。賀川はこの講演で、資本家の支配と搾取、資本の集中と格差の拡大をもたらした資本主義を厳しく退け、社会主義の側に立つことを明言する。しかし同時に、ソ連共産主義やファシズムも、中央管理の強制により人格を圧殺する点で長くは存続しないと見て、やはり厳しく退ける。そして、両者を乗り越える「第3の道」として提示したのが、兄弟愛を実践し助け合う協同組合主義の「友愛の経済」だった。

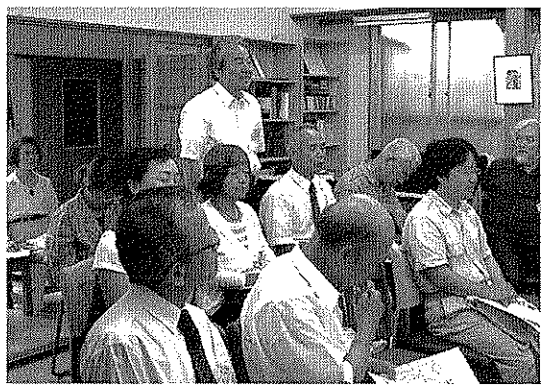
最終章ではこの視点から戦争の原因を分析し、「友愛に基づく世界平和」を提唱。「経済活動のすべてを、贖罪愛の意識的行為によって浄化し合理化すること」を説き、経済活動の中にも神の理想を成就しようと努力するのでなければ、世界の平和は決して確立されないであろうと予告する。

野尻氏は、この「贖罪愛の実践」こそが賀川の社会改革運動の核心であることを指摘。昨年来の米国初金融恐慌で資本主義の矛盾が露呈し、営利企業でも行政でもないボランタリーな中間組織とその社会活動が注目されている現在、70年以上前の賀川のこの提言は今日的意味を失ってはいないと評価している。

同書には、先頃開かれた野尻氏の出版記念講演「賀川豊彦の『友愛の政治経済学』とその現代的意義」、賀川の理論と実践を現在に生かしていく責務を語った日本生活協同組合連合会の山下俊史会長の挨拶、賀川豊彦の略年譜や事業展開図を収めた「発刊に寄せて」の小冊子が付いている。

第10回シンポジウム「地方伝道を考える」より ③

信徒を牧会伝道の中心に


パネルディスカッションではフロアからも活発に意見が交わされた（7月14日）

「これからの教会は信徒が牧会伝道の中心になっていかないと壁にぶつかるだろうと思う。万人祭司をいかに徹底するかが課題です」。7月14日、新潟・佐渡で開かれた第10回シンポジウム「地方伝道を考える」のパネルディスカッションで、パネリストの松永堡智牧師（同盟基督・新津福音キリスト教会）はそう強調した。「牧師の務めは信徒たちを整えることです」

必ずしも地方教会に限ったことではない。これは初代教会に学び、宗教改革の精神を生かす教会形成の原則だ。だが現実に深刻な無牧化に直面している地方教会にとっては、ことさらに聞くべき提言だろう。

日本同盟基督教団新潟地区（11教会）は60年代、無牧教会に対応するため宣教師と信徒リーダーで「新潟地区運営委員会」を設け、その協力体制によって無牧の群れの維持を図った。これは、少数の教会でも信徒が関わり連携協力ができれば、地方教会が直面する無牧化の課題を乗り越えられることを示している。

「信徒たちが整えられ、愛によって成長するなら人々が寄ってくる教会になります。信徒リーダーで説教の賜物がある人はすればいいが、必ずしも説教だけではない。仲良く食事をしましょうといった日常生活の分かち合いも牧会です。信徒にはいろいろ賜物がある人がいっぱいいる。働きの場を提供したら牧会もできるのです」

「伝道」「牧会」の概念が固定化している、と松永氏は指摘した。「伝道は『活動』ではない。牧会や伝道は人間関係から生まれてくる。特に地方はそうです。その人が存在することによって、温かい交わりが生まれる。教え教えではなく、もっと生活の中で分かち合いがなされなければ……」

信徒教育といっても、日本の教会では知的教育が優先されてきた。霊性セミナーのような、人間関係を改善する経験がもっと必要だと松永氏は考えている。

人との対応を学ぶため新津福音キリスト教会では毎年、カウンセリングセミナーを開いている。統合失調症やうつ病など心病む人々への理解を深め、心のケアができる信徒が育つことを願う。

ディスカッションを総括した斎藤篤美氏（同シンポジウム発起人）も信徒のあり方に注目して、「牧師がいなくても信徒リーダーが自由に動ける教会。エルサレム教会型ではなく、アンテオケ教会型を目指すべきではないか」と感想を述べた。

終わり【根田祥一】